

# 焚火と猿と俳句と

尾池 和夫 (京都造形芸術大学)



▲モンキーバレイの焚火とヤクシマザル (撮影：江藤彩子)。

日本モンキーセンターの飼育担当の方たちからの情報は楽しい。何と言っても最近の話題は、猿たちが焚火にあたって暖をとり、焼き芋を奪い合う情景である。テレビなどにも風物詩として紹介され、わざわざ犬山を訪れる人たちも多い。

今年のシーズンは、2018年12月22日(土曜日)から2019年2月24日(日曜日)の土日祝日と12月31日(月)から1月6日(日曜日)の毎日、日本モンキーセンターのモンキーバレイである。

ホッカホカのサツマイモは好評である。かつて、伊勢湾台風で倒れた木を燃やしていたところ、サルたちが火の周りに集まってきたことから始まり、それ以来、毎年続いている。焚火の行われるモンキーバレイには、約150匹の「ヤクシマザル」が暮らし

ている。ヤクシマザルは、名前のとおり鹿児島県の屋久島に棲む。ニホンザルの亜種である。ニホンザルの北限は青森県の下北半島で、このヤクシマザルは最も南に棲んでいるニホンザルである。犬山にいるサルたちはすべて、1956(昭和31)年のモンキーセンター設立時に、屋久島からやって来た群れの子孫である。

今回の焚火期間には、特別のプレゼントがあった。12月15日、犬山の事務部の今井由香さんからの情報に、「なんと今年は鹿児島県から美味しい安納芋をプレゼントしていただけることに」とあった。12月22日にはお芋の贈呈式があり、試食もできるとい



▲“西郷どん”が駆けつけた贈呈式の様子(左)と、来園者に振る舞われた安納芋(右)(いずれも撮影：赤見理恵)。

モンキーバレイでは、来園者が買った餌を直接サルたちに与えることができる。サルたちは手を叩いて餌をおねだりしている。手を挙げてアピールしているサルもいる。その仕草にみんなが反応して餌を投げる。

ボス猿がまづ寄つて来る焚火かな 和夫

北京原人の遺跡には焚火の跡が残り、火を絶やさない工夫を行っていたことが確かめられている。約50万前から人は焚火を行っていたことになる。人類の歴史の中心につねにさまざまな種類の火との関わりがある。火に対する恐怖と理解と利用の歴史と言える。

犬山の日本猿だけでなく、日本人も昔から焚火を好んできた。焚火の痕跡は、旧石器時代のものが長



▲焼き芋をほおぼるヤクシマザル (撮影：高野智)。安時代の古語拾遺

崎県佐世保市の洞窟内で見つかったという。日本書紀の「天石窟之条」の火処焼(ほどころたき)というのが記載された最初だとい



には「庭燎挙して」とあり、宮中や神社の夜間の儀式で、穴を掘って火処(ほどころ)とし、松薪を積んで火を焚いた。

今では、街中での焚火は法的にできないことが多いが、それでも「非常災害のために必要な応急措置として行う行為はこの限りでない」という条文が付いている。

秘密基地めくや焚火の跡のあり 和夫

焚火あと見届けてをる一人酒

大焚火せる山伏や聖護院

千の手の焚火にかざす寺の庭

夫の手を離し焚火にかざしけり



尾池 和夫  
おいけ かずお

京都造形芸術大学学長、公益財団法人日本モンキーセンター理事長、静岡県公立学校法人理事長。東京で生まれ高知で育った。1963年京都大学卒業後、京都大学助手、助教授、教授を経て第24代京都大学総長、国際高等研究所所長、2013年4月から京都造形芸術大学学長。著書に「新版活動期に入った地震列島」、「日本列島の巨大地震」、「四季の地球科学」、「2038年南海トラフの巨大地震」、「あっ！地球が・・・」、「句集 瓢鮎図」など。